

# 短期大学における介護学生の卒業時の介護観の検討 —授業・実習との関連と新カリキュラムへの課題—

石田 京子\*, 小田 史\*\*, 田中 真佐恵\*\*, 鴻上 圭太\*\*, 上山 小百合\*\*, 山田 義秀\*\*

## 要約

介護福祉学科Ⅰ部及びⅡ部学生の卒業直前の『私の介護観』のレポートより、学生の介護観を検討した結果、コアカテゴリーとして【専門性】、【倫理性】、【個別性】の3つが抽出された。

学生は授業での学びと実習での経験から【科学性】として、「専門的知識」、「専門的技術」の必要性和活用の重要さと、「対象者との連携」、「家族との連携」、「多職種連携」、「地域との連携」等の連携の必要を学んでいた。また、介護実習での実習指導者や先輩の実践から介護福祉士としての「人権尊重」、「信頼関係の必要性」、その専門職としての職業的社会的な「仕事への使命感」や「仕事への価値観」、「仕事の責任性」等の専門職としての「倫理性」を感じていた。そして、自分自身の介護実践の中から「個別介護」として【個別性】の重要性を学んでいた。

このように介護福祉学科の学生は旧カリキュラムの学びのなかで、【科学性】と【倫理性】に裏付けられた対象者の【個別性】を大切にするという介護観を持っていることが明らかになった。学生の肯定的介護観の形成には、実習指導者とのさらなる連携の必要性が示唆された。

キーワード： 短期大学生 介護観 科学性 倫理性 個別性

2010年9月30日受理（教育研究）

## I. 緒言

大阪健康福祉短期大学介護福祉学科（以下、本学という）は、介護福祉士養成の短期大学として2001年度の開学より、介護福祉実習の目標の一つに「介護福祉士の専門職としての責任と役割について考え、自己の介護観を深める」を掲げている。介護福祉実習中心にカリキュラムが構成され、卒業時には、介護の「プロフェッショナル」にふさわしい知識や技術を身につけている事を期待している。しかし、そのプロフェッショナルとしての介護観がどのようなものかは、今まで検証してこなかった。

看護学の分野においては、野戸らは<sup>1</sup>看護観の形成は「それまでの生活史や日常体験、専門分野、臨床体験等のよって培われ、深められ、その核となるのが看護

基礎教育における学習体験である」と述べられており、様々な学習段階での看護観の研究や、看護観形成の過程の研究等がなされている。しかし、介護においては現在、この教育上の重要な介護観について研究がほとんど見当たらなかった。

そこで本研究では、本学における学生の介護観に焦点を当て、介護福祉学科の授業や実習の中からどのような介護観を形成し、将来の自分の就く介護福祉士としての意味づけを行っているのかを明らかにした。

また、介護福祉士教育カリキュラムは、2009年より改正が行われ、内容的に大きく変わったカリキュラムとなっている（以下、新カリキュラムという）。これは、1987年の「社会福祉士及び介護福祉士法」制定時の介護福祉士教育カリキュラム（以下、旧カリキュラ

\*大阪健康福祉短期大学

連絡先

〒590-0014 堺市堺区田出井町2-8

大阪健康福祉短期大学 介護福祉学科

E-mail: k.ishida@kenko-fukushi.ac.jp

\*\*大阪健康福祉短期大学

ムという)以来、多少の改訂はあったものの、初めての大幅な改正である。旧カリキュラムでは、時間数は1650時間で「介護技術」、「老人福祉論」、「実習指導」等の科目名によりカリキュラムが構成され、その科目の対象領域が明確になっていた。新カリキュラムでは、「人間と社会」、「介護」、「こころとからだのしくみ」の3領域から構成し、時間数は1800時間となり介護分野の時間数が大幅に増加した。また、内容的にはWHOが提唱するICF(International Classification of Functioning, Disability and Health;以下ICFという)の考え方を中心に取り入れた内容となっている。これについて、厚生労働省は、「新しい介護福祉士像」を提唱し、介護福祉士の質の向上を図るためとしている。本学では、2002年度の開学から2009年度の卒業生までは旧カリキュラムで、2009年度の新入生からは新カリキュラムで教育を行っている。この旧カリキュラムの教育内容と教育効果についても検証し、現行の新カリキュラムの課題への示唆を得る事とした。

## II 研究目的

本学では、昼間課程(2年間)を1から4セメスターに、夜間課程(3年間)を1から6セメスターに分けて教育を行っている。その最終セメスター(昼間課程では4セメスター、夜間課程では6セメスター)の『介護概論II』の終了時に課題としている「私の介護観」のレポートを分析し、学生の持っている介護観を明らかにする事と、介護福祉士養成の旧カリキュラムの教育効果と新カリキュラムの教育上の課題を明らかにする事を目的とした。

## III 研究方法

### 1. 研究対象と方法

#### 1) 研究対象

介護福祉学科2008年度卒業のI部学生51名、II部学生10名と、介護福祉学科2009年度卒業のI部学生28名、II部学生14名の計103名である。

#### 2) データ収集

介護福祉学科養成校での最終セメスターでの、「介護概論II」の授業終了後に提出した「私の介護観」のレポートの記述内容により、介護観に関するとされる文脈を抽出し、データとした。

### 3) 分析方法

- (1) 学生の「私の介護観」のレポートの内容から各学生の介護観の文脈を抜き出ししてカード化を行い、KJ法によって分析し、カテゴリー化した。
- (2) カテゴリー化の際には、研究グループのメンバーが不一致のないように分析した。一致率は96.6%であった。

## 2. 倫理的配慮

研究対象者には、得られたデータ以外には研究目的に使用しない事、匿名性を保ち、結果から個人が特定されないようにプライバシーの保護に努める。

## 3. 用語の定義

- 1) 介護観：介護に対する考え方・見方であり、対象者の理解や支援の方向性を決定する際の基本となるものとした。
- 2) 専門的知識：介護過程を中心とした論理的思考が可能となる介護の知識とした。
- 3) well-being：生活の中で自己決定権や自己選択権が保障され、精神的身体的に安定し、満足のいく状態とした。

## IV. 結果

『私の介護観』のレポートより、358枚のカード化が行われた。KJ法による分析の結果、【科学性】、【倫理性】、【個別性】の3つがコアカテゴリーとして抽出された。【 】はコアカテゴリー、《 》はカテゴリー、< >はサブカテゴリーを示す。

### 1. 【科学性】

【科学性】のコアカテゴリーは、全データのうち41%と最も多く、その内容を表1に、構成を図1に示す。学生は、介護観の【科学性】の中で、《専門的介護技術》について最も多く(73.5%)記述していた。

【科学性】とは、日々実践される介護が、専門知識や技術を根拠とした、客観的で科学的な思考によるものである事を示すもので《専門的技術》、《多職種連携》、《専門的知識》、《対象者との連携》、《家族との連携》、《地域との連携》の6つのカテゴリーで構成されていた。

表1 【科学性】

カテゴリー	サブカテゴリー	生データ
《専門的技術》	＜well-beingをもたらす支援＞	・生活に笑顔が出るような充実した時間につながる介護支援 ・利用者の方一人ひとりが自分らしく生きていける様に支援が出来る ・生きる喜びを感じてもらえるような援助がしたい
	＜質の高いコミュニケーション＞	・介護はコミュニケーションを基本にして成り立つ仕事だと思う ・コミュニケーションなしでは利用者との信頼関係も築けないし、利用者の本当に求めていることもわからない ・介護に大切なことは利用者の気持ちを読みとる・聞くこと
	＜技術の応用＞	・利用者さんのどんなに小さな変化にもすぐに気付く ・利用者の方のペースに合わせることの重要性
	＜根拠に基づく支援＞	・生活全体を捉えた支援を考えることが介護を行う上で、本当に大切なこと ・「なぜそうするのか」という疑問を持つことが大切
	＜安全な支援＞	・利用者にとって安心で安全な介助を考え実施すること ・正確な介助も心がけることで、利用者の感じる不安・不快要素を確実に取り除くことができる
	＜対象者受容＞	・さっきできたことがいまはできないこともあり、利用者の依存性を受け入れることが、利用者の気持ちの安定につながる
	＜心を響かせる支援＞	・利用者さんの気持ち、考え、意欲、意思、喜怒哀楽を引き出せる介護
《多職種連携》	＜情報の共有化＞	・生活状況の確認では、職員一人一人が情報を共有する事で、適切な対応を考える事ができると考える
	＜多職種との協働＞	・色々な職種から利用者の方を理解し、支えることで利用者の方一人一人に合った良い介護を提供することが出来る
《専門的知識》	＜知識の応用＞	・一回一回利用者の方の状態や変化を理解する事が必要であり、その上でどのような対応をすれば良いのかを考えることが必要である
	＜可能性の追求＞	・今までどおりの生活ができるように、また好きなことを続けられるように、その方にとって必要な支援を考えて介護ができるようになりたい
《対象者との連携》	＜対象者との協働＞	・利用者さんと職員さんの連携、或いは、協力し合える関係が大切だと感じた。
《家族との連携》	＜家族との協働＞	・家族の方からも話を聞くことでより一層、利用者理解につながりまた利用者の方だけでなく家族の方とも信頼関係を築くことができる
		・介護福祉士は介護の専門家として家族にアドバイスすることが重要
《地域との連携》	＜地域との協働＞	・地域でのネットワークをつくっていくことが新しい情報を知り、今まで知らなかった視野が人がって行く。利用者にとってもより良い適切な支援につながる。

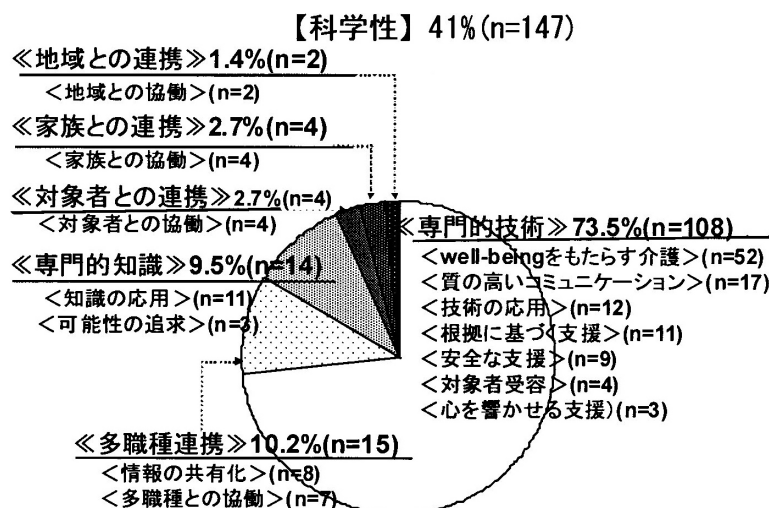


図1 【科学性】の構成

### 1) 《専門的技術》

〈well-being をもたらす支援〉、〈質の高いコミュニケーション〉、〈根拠に基づく支援〉、〈安全な支援〉、〈技術の応用〉、〈心を響かせる支援〉、〈対象者受容〉のサブカテゴリーで構成されていた。

最も多く挙げられていた〈well-being をもたらす支援〉は、対象者が日々の生活を安心して、生きがいを感じ自分らしく幸せに生きる事ができるような支援が重要であるとしていた。

〈質の高いコミュニケーション〉は、介護の基本であり、コミュニケーションを通じて対象者との信頼関係の構築を図り、対象者の本当のニーズや訴えを汲み取る事ができると捉えられていた。

〈根拠に基づく支援〉は、介護技術ひとつとってもその支援がなぜ行われているのか科学的根拠に裏付けされている必要がある事の大切を捉えていた。

〈安全な支援〉では、対象者だけではなく介護者にとっても負担のない適切な介護技術の実践が、対象者の安心できる暮らしに繋がるとしていた。

〈技術の応用〉では、対象者一人ひとりの持つ能力に合わせた支援の実践が大切であるとしていた。

〈心を響かせる支援〉は、対象者の生きがいや意欲を引き出す事のできるような支援と捉えていた。

〈対象者受容〉は、介護では自立支援を目指すのが、そういった他者への依存心やその時の対象者の気持ちを介護者は受容する事も必要であるとしていた。

### 2) 《多職種連携》

〈情報の共有化〉では、対象者の支援に関わる職員全員一介護福祉士、ヘルパー、医師、看護師、理学療法士、管理栄養士等で情報を交換・共有する事が、介護には大切であるとしていた。

〈多職種との協働〉では、支援には介護職のみならず、看護師や理学療法士等の様々な専門職も関わっており、各専門職とも協働する事で、一人ひとりに合った介護支援ができるとしていた。

### 3) 《専門的知識》

〈知識の応用〉では、介護を行う上で、まず対象者のADLや障害、疾病等の心身状況をきちんと把握する事が重要性を挙げる意見が多かった。

〈可能性の追求〉では、介護者は諦めずに、対象者のより良い支援を探り続ける必要があるとしていた。

### 4) 《対象者との連携》

〈対象者との協働〉では、介護は介護者側が一方的に、介護サービスの提供を行うのではなく、共に考え、創っていく事が大切であるとしていた。

### 5) 《家族との連携》

〈家族との協働〉では、対象者の家族との良好な関係性を築く事は、対象者本人だけではなく家族の意向も含め、対象者の望む支援と一緒に考える事が求められるとしていた。また家族が抱える介護の不安等があれば、介護専門職として適切なアドバイスができる事も望まれるとしていた。

### 6) 《地域との連携》

〈地域との協働〉は、地域で暮らすためには、地域住民の協力や見守り、要介護者を支援できるコミュニティづくりが求められるとしていた。

## 2. 【倫理性】

【倫理性】のコアカテゴリーの内容を表2に、構成を図2に示す。【倫理性】は、【科学性】に次いで多く、全データの38%を占めていた。

【倫理性】は、《人権尊重》、《信頼関係》、《仕事の使命感》、《仕事の責任性》、《仕事の価値観》の5つのカテゴリーから構成され、専門職業人として基盤になるものが示されていた。

### 1) 《人権尊重》

〈対象者の尊重〉そのものであり、対象者をまず「人」として尊重する事そのものと捉えていた。対象者を受け入れる事、介護者の価値観を押し付けない事、対象者の「その人らしさ」を尊重する事等が挙げられていた。

### 2) 《信頼関係》

〈相互の承認〉、〈対象者からの承認〉、〈対象者の満足感〉によって構成され、「介護」とはまさに介護者と対象者との間の「信頼」の上に成り立っていると認識されている事が表現されていた。

〈相互の承認〉には、介護福祉士と対象者との間には互いに尊重し合い、支えあうといった相互関係が存在するという内容が記述されていた。

〈対象者からの承認〉は対象者から信頼される介護

表2 【倫理性】

カテゴリー	サブカテゴリー	生データ
《人権尊重》	＜対象者の尊重＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・否定や制止をしない「受け入れる介護」である。個人を尊重する介護を目指したい。</li> <li>・その時の利用者の思いを大切に、利用者の思いを優先した関わりを大切に介護</li> <li>・その人を尊敬しその人らしく最期までいられることを支えることが大切だと私は思う。</li> </ul>
《信頼関係》	＜相互の承認＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者にとっても、私にとっても、お互いが自然と笑顔となって、楽しいと思えるような関係を作っていきたいと考える</li> <li>・利用者と互いに一人の人間として尊重し合えるパートナー的な立場でありたい</li> <li>・気持ちの部分でお互いが支え合い、プラスになっていくような関係</li> </ul>
	＜対象者からの承認＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・信頼のない介護福祉士に身体を預けようと利用者さんも思わない。</li> </ul>
	＜対象者の満足感＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「またきてね」と言われるような援助をすることが大事</li> </ul>
《仕事の使命感》	＜自立・自律を引き出す支援＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現存機能を活かすこともその人らしさを守ることだと気付いた。</li> <li>・自立と依存この2つのバランスを良い状態で保ちながら支援していくこと</li> </ul>
	＜仕事に対する向上心＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の理想を追い求めていくことで、利用者さらに良い介護サービスを提供しようという気持ちが高くなり、それが介護の質に影響してくる</li> </ul>
	＜仕事の専門性の自覚＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者の方々だけに対して施設内や在宅の場での介護だけが求められるわけではなく、高齢者や障害者、社会的な福祉の対象者にも目を向けていくことも必要</li> </ul>
	＜仕事の役割への自覚＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者のために何が出来るか考えられる介護福祉士でありたい。</li> </ul>
《仕事の価値観》	＜仕事に対する満足感＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者と喜びを共有できた時、私はそんな時に介護の仕事の魅力を感じる</li> </ul>
	＜相互関係からの成長＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私たちが支援をして元気や笑顔を取り戻してもらい、逆に利用者の方のかかわりを持ち成長できる関係</li> </ul>
	＜仕事の楽しさの発見＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身が介護という仕事の楽しみを見つけること</li> </ul>
《仕事の責任性》	＜感情の制御＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・柔軟な心を持ち、気持ちの余裕をもつことが介護福祉士には必要</li> <li>・常に笑顔心がけていれば相手にも好印象になり、心を開きやすくなる</li> </ul>
	＜自己管理＞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介助をする上では、まずは自分の体調管理をしっかりすることも大切</li> </ul>

【倫理性】 38% (n=135)

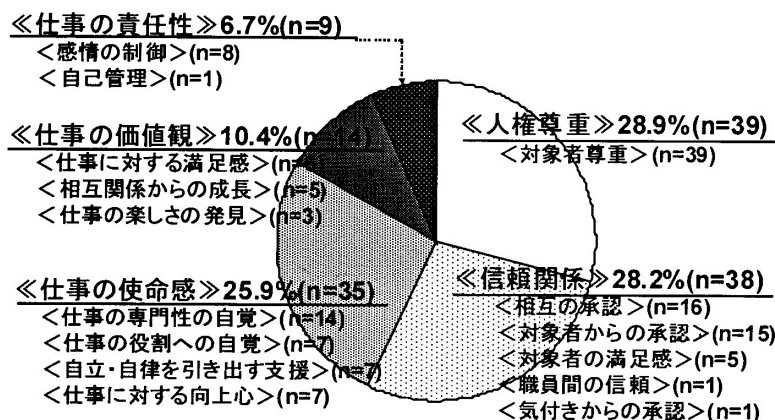


図2 【倫理性】の構成

福祉士像が見られ、〈対象者の満足感〉は対象者に感謝や依頼の気持ちを抱いていただく援助と挙げられていた。

### 3) ≪仕事の使命感≫

〈自立・自律を引き出す支援〉、〈仕事に対する向上心〉、〈仕事の専門性の自覚〉〈仕事の役割への自覚〉で構成され、「介護」の仕事を実感し、追及する姿勢と捉えていた。

〈自立・自律を引き出す支援〉では、自立支援を目指した介護の中で依存との共存を追及する視点が挙げられていた。

〈仕事に対する向上心〉介護の理想を高く持ち、技術・知識の向上を継続する事が挙げられていた。

〈仕事の専門性の自覚〉は福祉全般へ目を向ける事、〈仕事の役割への自覚〉は対象者のために何が出来るかを考えられる事と、記述されていた。

### 4) ≪仕事の責任性≫

〈感情の制御〉、〈自己管理〉で構成され、自己をコントロールできる事。それは、心に余裕を持つ事や体調管理をする事として記述されていた。

### 5) ≪仕事の価値観≫

〈仕事に対する満足感〉、〈相互関係からの成長〉、〈仕事の楽しさの発見〉で構成され、「介護」の仕事の中に成長や楽しさが見出されると捉えられていた。具体的には、対象者と喜びを共有できる、対象者との関わりの中で成長できる、介護という仕事の楽しみを見つける事等と表現されていた。

## 3. 【個別性】

【個別性】のコアカテゴリーの内容を表3に、構成を図3に示す。【個別性】は、最も少なく全データの21%であった。

表3 【個別性】

カテゴリー	サブカテゴリー	生データ
≪個別介護≫	〈対象者理解〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者様を様々な視点、距離から観察する事、接する事が必要だと考える</li> <li>・相手をもっと知りたい、理解したいという気持ちがあれば強い信頼関係を築くことが出来る</li> <li>・その人の気持ちや何を感じているのかを考えてみて、その人の目線になればどんな声かけをしたらいいか分かるし、いい介護をするために必要</li> </ul>
	〈対象者にあつた支援〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人ひとりの利用者に合わせて介護技術・介護方法等を見つけ出し、介護者のペースではなく、利用者のペースで生活を送って頂くこと</li> <li>・利用者の生活されているリズムに合わせて、その方に応じた援助</li> <li>・利用者の生活歴や病歴、精神状態などを把握して、利用者さん個々に合った支援を考えて実施していかなければならない</li> </ul>
	〈寄り添う支援〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉で伝えることができなくても、ちょっとした仕草や、いつもの違いや態度から、なにを考え、なにを伝えようとしているのかを、その利用者の気持ちに寄り添い心の言葉を聞くことが大切だと私は感じた。</li> <li>・利用者の立場に立つて考え、気持ちに寄り添った介護をすること</li> </ul>

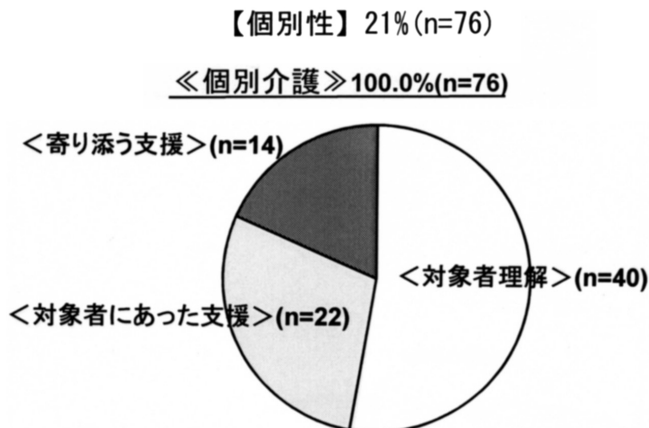


図3 【個別性】の構成

【個別性】は、個別の介護についてどのような捉え方をしているのかを具体的に示す内容であり、カテゴリは「個別介護」であった。サブカテゴリは「対象者理解」、「対象者にあった支援」、「寄り添う支援」の3つで構成されていた。

「対象者理解」では、対象者がどのような人なのかを知る、理解する事は、個別介護における基本であるとしていた。「対象者理解」をする手立てとして、様々な視点からの観察・情報収集・分析、自分自身に置き換え考える等の方法が挙げられていた。また知りたい、理解したいという介護者の気持ちが、対象者との信頼関係の構築にもつながるとしていた。

「対象者にあった支援」では、日常の生活リズムを捉える事、生活歴を含めた様々な角度から手がかりを得ていく事が挙げられていた。

「寄り添う支援」では、特に対象者の心に寄り添う事の大切さを挙げたものが多かった。特に対象者が自ら訴えられない場合や本心を語らない場合において、対象者を主体とした介護を行うためには、対象者の思いを汲み取り、ニーズへと結びつける事が求められるとしていた。

## V 考察

### 1. 介護観の【科学性】について

全データの中で 41%と最も多く記述されていた【科学性】の中でも、その 73.5%を「専門的技術」が占めていたのは、対象の学生が履修した旧カリキュラムの構造と関係していると考えられる。旧カリキュラムの時間数は、介護技術演習と形態別介護技術演習を中心とした介護福祉援助方法が、介護福祉実習を除いた授業の 31.8%を占め、2ないし3年間に渡って何らかの介護技術演習を履修している事となる。また、第1段階実習から第3段階実習を通して悩むのも介護技術であろうと思われる。しかし、学生が持っている介護技術に対する介護観は、“上手くできる”や“早くできる”というようなマニュアル的な介護技術ではなく、「well-beingをもたらず支援」が最も多く記述されていた事は、介護技術演習の授業内容と関係すると思われる。筆者らの介護技術演習授業の研究<sup>2,3</sup>で報告したように、介護技術を手順で教えるのではなく“事例を軸にしながら、学生が考える介護技術演習”の授業を展開してきた事により、学生は常に“対象者にとってより良い支

援の方法とは”を問い続けてきたためと思われる。介護技術の原則を①人権尊重、②自立(自律)支援、③安全安楽、④科学的根拠の4つに置き、支援の方法を考えるにあたっては、これらの原則を網羅している方法である事を強調してきた。その事は、他のサブカテゴリの介護観、「質の高いコミュニケーション」や、「根拠に基づく支援」、「安全な支援」、「対象者受容」、「心を響かせる支援」を形成する上で影響を及ぼしているものと思われる。

「専門的知識」のサブカテゴリの「知識の応用」や「可能性の追求」は、基礎知識を持っている事を前提として、今後自分たちが介護福祉の現場で使用する知識の方向性や使い方を介護観として持っている事を表わしていると考えられる。

また、学生は介護を一方向的にサービスとして提供するものではなく、「対象者との協働」や「家族との協働」、「多職種との協働」、「地域との協働」等、介護は対象者、家族、多職種、地域と連携しながら成り立っていくものであるという介護観を育てていた。これは施設実習や訪問介護実習の中で、さまざまな場面や行事等をとおして形成されてきたものと考えられる。介護教育分野での先行研究は見当たらなかったが、看護教育分野では、望月らの研究で<sup>4</sup>、「看護学生は実習で学生と同行する看護師の看護観より影響を受ける」としている。これは、介護でも同様の事が言えるのではないかと考える。実習で目の前の事に必死になっている学生に、「対象者との連携」、「家族との連携」、「多職種との連携」、「地域との連携」という具体的に目に見えないものを意識化させるプロセスは、実習指導者の指導なしには成し遂げられない事である。ここに実習指導者の介護観が反映し、その指導性が現れているものと考えられる。

### 2. 介護観の【倫理性】について

介護観の【倫理性】の中で最も多く記述されていたのが、「人権尊重」である。これは、本学の基本理念の中で謳われている「この分野の任にあたる人材には、その専門性と倫理性、人格が問われ—中略—本学の設立もその一翼を担う」とい方針から、本学独自科目の中に必須科目として『日本国憲法』を取り入れ、すべての授業の中で人権尊重の考え方を基盤としてきた事と関係していると考えられる。特に

『介護概論Ⅰ』では基本的な介護倫理の知識、『介護概論Ⅱ』では事例による倫理的な課題の検討等、意識的に学生の中に倫理観が育つような教育内容を心掛けてきた。そのような教育と介護実習での経験から「人権尊重」の介護観が形成されたと考える。

次に多く記述されていた「信頼関係」であるが、これは実習施設での経験が大きく影響していると考えられる。介護には、「相互の承認」、「対象者からの承認」が必要という介護観は、実習場面で自分が実際に経験した事から発していると考えられる。介護実習の場では、学生が関わってもなかなか笑顔を見せてくれなかった対象者が、実習指導者やスタッフが関わると、まるで別人のように笑顔で対応されるというような事はよくある事である。そして、学生自身も信頼関係ができてくると対象者から受け入れられケアがスムーズに展開されるという経験をしている。このような体験の中から、学生は「対象者からの承認」や「相互の承認」の必要性を認識したものである。

「仕事の使命感」や「仕事の価値観」、「仕事の責任性」の категорияは、職業的社会的化と関係する категорияと考えられる。今津によると<sup>5</sup>職業的社会的化とは“将来従事する、または現在従事している職業の地位・役割達成に必要なとされる知識・技術・価値規範を獲得し、その職業へ一体化を確立していく過程”とされている。“必要とされる知識・技術”は2年間ないし3年間の教育の中で培われていくが、“価値規範”は、それぞれの学生の中に自覚的に培われていくものである。厳しい労働環境の中で、3Kと言われる離職率も高い介護福祉士という職業について学生は、「仕事の専門性への自覚」や「仕事の役割への自覚」等の「仕事の使命感」を認識し、「仕事に対する満足感」や「相互関係からの成長」等の「仕事の価値観」を見出し、それを達成するための「感情の制御」や「自己管理」という「仕事の責任性」を感じていた。これは、介護実習で介護を実践する事の難しさと同時に、面白さ、充実感を感じ、介護という職業の魅力を身をもって体験し、言語化し、内面化した結果ではないかと考える。これは、介護福祉士という専門職を担っていくときの大きな強みになっていくものと思われる。小元らの4年制の看護大学生を対象にした研究<sup>6</sup>では、4年次のゆとりのあるカリキュラムになって初めて、それまでの講義

や実習を振り返る時間を持たず、看護という専門職への職業的社会的化が確立されるとしている。本学のような短期大学での短い修業年限の中で、学生が介護福祉士という専門職の職業的社会的化を成しえていた事は、専門職を育成する大学としては大きな成果であると考えられる。これは、第3段階実習報告会で、『卒業生から介護観を学ぶ』機会を持っている事も影響していると考えられる。また、実習施設の実習指導者が、本学の前身の専門学校<sup>注1</sup>の卒業生である場合も少なくなく、後輩に対する熱い思いを持って実習を指導していただけではないかと思う。このような職業的社会的化が、卒業時に一定できている事が、本学の卒業生の多くが、介護の仕事を辞めずに続けている事の一つの要因と考えてよいのではないかとと思われる。

### 3. 介護観の【個別性】について

旧カリキュラムでは、「個別介護」を学問的に学ぶ介護過程の授業時間が30時間と少なく、全授業時間数の2.3%であった。これを補うため、第1段階実習では、一人の対象者のプロフィールのスケッチ、第2段階実習では情報収集、第3段階実習で介護過程の展開を行うというように全実習をとおして段階的に学べるように計画した。しかし、実際に介護過程の展開を行う第3段階実習は21日間と短く、なかなか介護計画を立案して、実施にまで至るのは困難な事が多いのが現状である。その中でも学生は、「対象者理解」の大切さを学び、「対象者に合った支援」の必要性を感じ、「寄り添う支援」を実践していく事の重要性を感じていた。これは、対象者の日々のケアに、学生の拙い介護への思いを生かしてくれた実習指導者の行動やアドバイスから学生は多くのものを学び、自分の介護観としていったものと思われる。

### 4. 学生の肯定的介護観形成プロセスへの今後の課題と方針

本研究では、カード数の割合では、【科学性】が最も多く147データ、次いで【倫理性】の135データ、最も少なかったのは【個別性】の76データであった。これは、先に述べたように旧カリキュラムの介護技術演習が中心となっていた内容と関連していると考えられる。現在実施している新カリキュラム

では、介護過程の授業時間数が150時間あり、介護の【個別性】について学ぶには十分な時間配分と思われる。しかし、学生が実際に介護観を育てていくのは、大学での講義を基盤としながらも介護実習の体験の中で行われている。安藤らの研究<sup>7</sup>でも、個を尊重する実践は実習において修得されていた。また、木村<sup>8</sup>は、学生が肯定的介護観、否定的介護観を持つかは教員や臨床の実習指導体制の関わりが大きいとしている。これらの事より、教員は実習指導者と連携を強めながら、実習前、実習中、実習後を通して学生が肯定的介護観を持てるような関わりを持っていく必要があると言える。

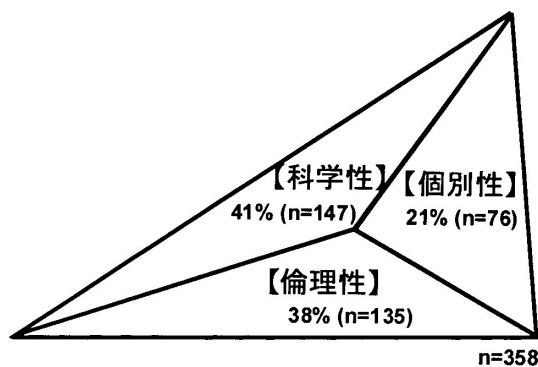


図4 学生の介護観の構造

また、丹羽<sup>9</sup>は、「専門的介護の道は厳しく、人格の裾野を広げながら技術や科学性を獲得する事によってのみ、対象者の自律と健康や生活の自立に寄与できる」と述べている。図4は、本学の学生の介護観の構造を三角形で表したものである。本研究では、丹羽のいう「人格の裾野」を【倫理性】と捉えてみると、学生の介護観の倫理性という裾野は充分広いとはいえない。今後は、学生の介護観の【倫理性】の裾野を広げるため、新カリキュラムでも引き続き『日本国憲法』の授業を基盤にししながら、新設された『介護福祉倫理』の授業を重視していく必要がある。

学生の肯定的介護観の形成を促すためにも、実習Ⅰから実習Ⅱ、そして実習Ⅲへと、ステップアップしていく節目節目で「介護観」を言語化し、内面化していく必要があると考える。必要時に、学生に立ち止まって実習での体験の意味を考え、教員や指導者自身が介護観を語り、学生同士が考えを交換できる機会を提供していく事が求められる。現在実施している実習報告会をさらに工夫し、そのような機会

として有効に機能させていく事を、より一層努力していく必要があると考える。

本研究で、学生が介護実習の中で介護観を形成していく多くの要素を学んでいる事が明らかになった。この事は、教員と同様に実習指導者が学生とどのように関わり、どのような指導を行い、どのような事を語り合うかが、学生の介護観に大きな影響を与えているという事である。学生が、卒業前に職業的社会化を成しえて、福祉現場に就職し、介護福祉士として社会に貢献していけるような肯定的介護観の形成には、実習指導者との連携は最優先の課題であると言える。本学では2009年度より、本学の実習施設を対象にした4日間の「実習指導者講習会」<sup>注2</sup>を年に1度開催し、20名前後の参加者がある。この講習会の講師は本学の教員が行っているため、教員と実習指導者のコミュニケーションがスムーズになり、より連携がとりやすくなっている事も事実である。この講習会を継続し、もっと充実したものにしていく必要がある。また、実習施設の実習責任者を対象にした実習施設懇談会を年度初めに実施し、学生の状況や実習に対する総括と方針の説明、実習指導者との懇談等を行っているが、それだけでなく、普段から実習施設との連携を強化していく必要がある。そのためには、共同の学習会や事例検討会等も今後取り入れ、お互いの介護観や考え方を語り合い、理解し合える機会を持っていく方向性を検討する事が求められていると考える。

## VI 結論

1. 卒業時の学生は、【科学性】と【倫理性】に裏付けられた対象者の【個別性】を大切にするという介護観を持っていた。
2. 学生は、介護実習の体験のなかで、「仕事への使命感」、「仕事への価値観」、「仕事の責任感」の介護観を言語化、内面化し、職業的社会化を成しえていた。
3. 学生の肯定的介護観を形成するためには、新カリキュラムの中で「倫理性」の育成に力を注いでいく事が必要である。
4. 学生の介護観の形成には、実習担当教員と実習指導者とのさらなる連携の必要性が示唆された。

## 謝 辞

本研究に、『私の看護観』のレポートをデータとして使用させていただいた2008・2009年度の卒業生の皆様のご協力に、熱く感謝致します。

また、いつもながら文献の取り寄せに協力いただいた図書館の堀川さん、中山さん、好川さんにお礼申し上げます。

**注1** 大阪総合福祉専門学校のこと。1985年に開設された大阪保育研究所の「附属保育・学童保育専門学院」の経験を基礎に、1985年に大阪総合福祉専門学校として介護福祉学科を開校した。1996年、介護福祉学科夜間課程を開設し、1997年に「附属保育・学童保育専門学院」を「児童ケアワーク科」として大阪総合福祉専門学校へ発展的に統合し、2002年に大阪健康福祉短期大学介護福祉学科が開設されるまで介護福祉養成を行い、2006年に子ども福祉学科が開設されるまでは保育士養成を行っていた。

**注2** 「実習指導者講習会」は厚生労働大臣が定めた実習指導者研修のことである。新カリキュラムにおいて「実習指導者は、介護福祉士として3年以上実務に従事した経験があり、かつ、厚生労働大臣が別に定める研修課題（介護福祉士養成実習施設・事業等実習指導者研修課程）を修了した者」とされている。本学では、本学の実習施設に限定して実施している。

## 引用文献

1. 野戸結花・川崎くみ子・富澤登志子、2005、「成人看護実習における看護観形成」、『弘前大学医学部保健学科紀要』、4、pp, 69-74
2. 小田史・石田京子、2008、「事例演習を軸にした介護技術演習授業の効果～フォーカスグループを用いて～（第1報）」、『大阪健康福祉短期大学気紀要「創発」』、7、pp, 67-73
3. 小田史・石田京子、2009、「事例演習を軸にした介護技術演習授業の効果～フォーカスグループを用いて～（第2報）」、『大阪健康福祉短期大学気紀要「創発」』、8、pp, 103-113
4. 望月章子・古川真理子・小長井美和、2003、「実習が楽しみという学生の想いを継続できる実習指導（1）」、『教育の研究』、19、pp, 159-162
5. 今津孝次郎、2004、「教師の職業的社会的化」、『三重大

学教育学部研究紀要』、30、（4）、pp, 17-24

6. 小元まき子・宮脇美保子・寺岡三左子、2009、「4年制大学における看護学生の職業的社会的化—4年次の学生を対象として（第4報）—」、『順天堂大学医療看護部医療看護研究』、5、（1）、pp, 91-96
7. 安藤詩乃・加世田有季・中越登子、2008、「臨地実習における看護観の変化」、『バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌』、10、（2）、pp, 1-7
8. 木村淳也、2009、「介護観に関する考察」、『医療福祉研究』、5、pp, 13-24
9. 丹羽國子・山田薙夏、2003、『ICFに基づく介護概論』、アリスト出版社

# **An Analysis of Students' "View on Care after Two or Three-year Education Course to Become Certified Care Workers -Implications for Lecture-Practice Interrelationship in the New Curriculum-**

Kyoko Ishida\*, Fumi Oda\*\*, Masae Tanaka\*\*, Keita Kogami\*\*,  
Sayuri Ueyama\*\*, Yoshihide Yamada\*\*

## Abstract

The aim of this study is to explore how the students' view on care has developed when they just finished education course to become certified care workers in Osaka College of Social Health and Welfare. Students were required to write a report on "my view on care", and all the reports were analyzed by using a qualitative content analysis. The results revealed three principal categories: specialization, ethical view, and personalization. Students appreciated the importance of professional knowledge and technologies for practicing care, and the necessity of the professional ability making links with peoples around the care subject. Their main concerns as a future certified care worker were found to be human rights protection, interrelationship based on trust, and pride in working as a professional care worker. Through participating in care practice course, students learned why personalized care is important. The present results suggest that students' view on care is greatly affected both by theoretical learning in the classroom and the experiences of care practice in care institutions.

Key words: college students, view on care, specialization, ethical view, personalization

---

\*Osaka College of Social Health and Welfare

Contact Address:

〒590-0014 2-8 Tadei-cho, Sakai-ku, Sakai City, Osaka

Osaka College of Social Health and Welfare

Department of Care and Welfare

E-mail: k.ishida@kenko-fukushi.ac.jp

\*\*Osaka College of Social Health and Welfare

